MIZUBE USAGE
KNOW-HOW BOOK
from
MIZUBE SCHOOL 2018

「ミズベスクール」公式 facebook ページ
https://www.facebook.com/mizubeschool/

発行：国土交通省　近畿地方整備局

水辺活用
ノウハウブック

MIZUBE USAGE KNOW-HOW BOOK from MIZUBE SCHOOL 2018

INTRODUCTION

水辺からまちの価値を高め、賑わいを創造するプロジェクトが、全国各地で開催されており、全国のかわまちづくりやミズベリングで数多く発表されています。これは、市民や活動団体、民間事業者、自治体が公共財としての河川に価値を見出し、水辺を使いこなす意識が向上していると思われます。

しかし、各地で行われている水辺の賑わい創出事業（イベントや収益事業等）についての課題やノウハウが情報共有できる場や仕組みがなく、各行政機関によって、持っている水辺活用ノウハウや取り組み体制などは異なっています。

このことから、先進的な取り組みをされている事業から学ぶべきところは学び、また様々な水辺活用ノウハウをミズベスクールで各事業の実践者からの発表を通して普及啓発を行い、さらにミズベスクールや事前におこなった会議の内容を体系化し、ノウハウブックとしてとりまとめ、ミズベスクールにも来場できなかった水辺の利活用に関わる活動団体、自治体や河川管理者にも普及啓発するべきと考えました。

このノウハウブックは、先進的に取り組みをされている方はもちろん、水辺の活用を検討している市民や活動団体、民間事業者、自治体、河川管理者にとっても参考となる構成となっています。例えば、各事例の中で、「水辺の賑わいづくりを始める第一歩」についてまとめられているので、始め方を参考にしたりすることができます。活動を推進していく中で様々な課題にぶつかりますが、このノウハウブックでその課題についての解決策を見出してください。

※ ミズベリングプロジェクトとは

かつての賑わいを失ってしまった日本の水辺の新しい活用の可能性を、創造していくプロジェクト。水辺に興味を持つ市民や企業、そして行政が三位一体となって、水辺とまちが一体となった美しい景観と、新しい賑わいを生み出すムーブメントをつぎつぎと起こしていくプロジェクトです。

CONTENTS

04 水辺ノウハウ抽出のプロセスについて

先進事例紹介 ①
06 ミズベリング越前若狭

先進事例紹介 ②
10 おとがワ！ンダーランド

先進事例紹介 ③
14 わかやま水辺プロジェクト

事例紹介
18 淀川アーバンキャンプ

22 ミズベスクールの Q&A

24 事業を発展させていくための工程スケジュール

26 水辺事業を行う上での9つのチェックポイント

30 水辺のさらなる発展を目指して 専門家紹介・あとがき

水辺ノウハウ抽出のプロセスについて

About Process to extract the mizube know-how

1 Pre-hearing 事前ヒアリング

“かわまちづくり支援制度”や“ミズベリングプロジェクト”によって蓄積されてきた水辺活用の豊富な実績やその他全国のミズベリングの事例53事例、かわまちづくりの事例148事例から、民間の収益賑わい事業に関する先進事例の3事例を抽出。実際に各事業の現場に赴き、実践者から事業内容について事前ヒアリングを実施した。

●かわまちづくり支援制度とは

観光などの活性化に繋がる景観・歴史・文化等の河川が有する地域の魅力という「資源や地域の創意としての「知恵」を活かし、地方公共団体や民間事業者、地元住民との連携の下で立案された、実現性の高い河川や水辺の整備・利活用計画による、良好なまちと水辺が融合した空間形成を推進することを目的として、河川管理者が市町村等と連携してソフト・ハードの支援を行う制度

I

2 Conference ミズベノウハウ抽出会議

各事業から事前にヒアリングした内容に基づき、事業ごとにミズベノウハウ抽出会議を実施。各事業の実践者から事業内容について発表をしてもらい、専門家や河川管理者など関係者を交え、特筆すべきポイントや今後に向けた展開について議論を実施。先進事例に習って活動を実施したいと思っている団体等へ移行できるノウハウの抽出を実施。

●第1回〈ミズベリング越前若狭〉
（2017年11月22日）

●第2回〈おとがワ! ンダーランド〉
（2017年12月13日）

●第3回〈わかやま水辺プロジェクト〉
（2017年12月20日）

II

3 Mizube School ミズベスクール

先進事例を通じ、行政・民間事業者など多様な参加者が水辺活用を習得でき、水辺活用技術の普及啓発を目指すミズベスクールを実施。先進事例の3事例の紹介と専門家からのアドバイス、近畿地方整備局管内の事例として淀川アーバンキャンプの事例紹介も合わせて実施。会場から実践に向けての質問も受け付け、登壇者からの回答とともに、今後の水辺活用に向けたディスカッションを展開。

●ミズベスクール
日時 ： 2018年2月1日
会場 ： 大阪市中央公会堂 小集会室

III

4 Know-how Book ノウハウブック

事前ヒアリング、ミズベノウハウ抽出会議、ミズベスクールで得た水辺活用ノウハウをまとめたノウハウブックを作成。先進事例の3事例の概要とともに、事例の特筆すべきポイントと今後事業を発展させるためのポイントをまとめており、それらの内容を踏まえ、事業を発展させていく工程についてまとめている。また水辺事業を行う上での9つのチェックポイントについて述べ、水辺事業を推進する中で必要なことをまとめている。

IIII

先進事例紹介①

ミズベリング越前若狭

河川での小さなエコノミー経営実現に向けて

プロジェクト概要

日野川流域では、20年前から日野川流域交流会を中心に、流域市区町村の様々な立場の人達で環境活動や河川に関する議論を行うプラットフォームが形成されている。子ども達の川への関心を広めるイベント“そうだ!川に行こう”の開催は2017年で9回を迎えた。“そうだ!川に行こう”の前夜祭的位置付けで始まった日野川河川緑地公園で飲食やライブが楽しめる“おしゃれな「リ・BAR」”は2012年から行われている。小さなエコノミー経営を目指し、市の予算や助成金を入れない仕組みづくりがされている。

2017年は、車輪つきで簡単に移動できる小屋“6PGazebo”を開発し、アイデアを持った人に対して事前申込み制で“6PGazebo”を貸し出しする“Paradise in RIVER”という新たな取組みを行なった。また日野川の“おしゃれな「リ・BAR」”では様々なプロが集まる集団を作ることも目標としている。

河川の環境活動からはじまり、現在は河川でのビジネス実施・まちの活性化事業に繋げていっている。

実施範囲 Range of implementation

●種別

- 河川敷
- 公園
- 水面
- 道路
- 民有地

●住所

福井県あらわ市・坂出市・勝山市・大野市・福井市・鯖江市・越前市 / 小浜市

●河川名

九竜頭水系日野川　九竜頭水系足羽川
九竜頭水系九竜頭川 / 北川水系北川　北川水系南川など

●河川管理者

○近畿地方整備局福井河川国道事務所…九頭竜川、北川、日野川の一部　○福井県…北川、日野川の一部、足羽川、北川水系

河川・場所の特徴・魅力 Features of rivers and location

Map data ©2018 Google

おしゃれな「リ・BAR」が開催されている日野川河川緑地公園は、日野川の中流エリアの広い空間である。広い空間を活かして、BARだけではなく音楽を楽しめたり、若者に楽しんでもらえる空間づくりを行っている。

実施体制・スキーム Implementation system, Scheme

〈 おしゃれなリ・BAR(日野川) 〉

河川管理者：福井県 ― 協議 ― 公園管理者：越前市

申請 ↑ ↓ 許可・取消　　申請 ↑ ↓ 許可・取消

占用主体：日野川流域交流会
（事務局）おしゃれなリ・BAR 実行委員会

↑ 事業者　↑ 来場者

事業者:出店料
来場者:入場料
→運営費とする

〈キーパーソン〉

［民間］

一般社団法人環境文化研究所 代表理事

田中謙次氏

川の体験活動や安全指導者であり、さらに「おしゃれなリ・BAR」などリバー・シェアリング・エコノミーに取り組んでいる。

［民間］

おしゃれなリ・BAR実行委員会

筏 洋介氏

「おしゃれなリ・BAR」実行委員会では委員長をつとめ、武生青年会議所在籍中にNPOえちぜんの立ち上げを行い、様々な立場から地元活性化に取り組んでいる。

［学校］

日野川流域交流会 会長

奥村充司氏

福井工業高等専門学校環境都市工学科准教授。日野川流域交流会の中で“リバビズ大学”の立ち上げも中心的に行う。

［行政］

越前市 都市計画部 建設課

上木 淳氏

「おしゃれなリ・BAR」などの実施に向け、行政側から事業者との協議を行いながら、実行委員のメンバーとして、テントの開発も行っている。

時系列 Time series

▶2007年～

「そうだ! 川に行こう!」イベント開始

川や砂礫河原の生き物の観察や川遊び体験など、日野川の魅力を発見し、川への関心を高めるイベント。

▶2012年～

おしゃれな「リ・BAR」
@日野川河川緑地公園（越前市）

「そうだ!川に行こう!」の前夜祭的位置付けで始まった日野川河川緑地公園で飲食やライブが楽しめるイベント。小さなエコノミー経営を目指す。

2012年、2013年、
2014/8/29～8/31
2015/8/28～30、
2016/8/24～8/28

▶2015年～

ミズベリング越前若狭会議

第一回は水辺が持っているポテンシャルに気づくことを目的に開催し、第二回は水辺の将来像を描き、第三回は笑いの要素を取り入れ課題を共有する内容で実施。

○2015/3/12「ミズベリング越前若狭」○2015/11/26「若狭ミッション会議」○2015/12/01「足羽川ミッション会議」○2016/3/17「ミズベリング越前若狭 2ndSTAGE」○2017/3/8「ミズベリング越前若狭 3rdSTAGE」

▶2015年～

川TERRACE（テラス）
@足羽川右岸幸橋北詰付近（福井市）

足羽川で、福井市の酒販店がワインバーを出店し、常駐のワインソムリエが接客するバーを期間限定で実施。トイレの貸出など近隣のホテルなどと連携して行う。

2015/11/13～15、11/20～22
浜町足羽川利用促進協議会主催で川TERRACEが 2016/4/1～2、4/8～9と2017/3/31～4/1、4/7～4/8に開催。その後不定期に開催。

▶2016年 2.29～

浜町足羽川利用促進協議会設立

飲食店ホテル経営者等協議会委員が集まり、幸橋下流の足羽川右岸の河川敷の占用許可取得を視野にいれ賑わいづくりを目指す。

○2016/12/27
「浜町界隈 足羽川ワークショップ」

▶2017年 7.31-9.3

リ・BAR のスピンオフ企画
― MIZBE de IDEA ―

Paradise in RIVER! <みんなの水辺天国>

新しいテーブル椅子セットを皆様にお貸しし、各々が持ち込む企画をサポートするイベントを1ヶ月間実施（2017年度のみ貸出無料）。
2018年は名称を「River Paradise」に変更し、3ヶ月間実施予定。

〈特筆ポイント〉

行政支援のあり方

1

流域市町村を繋ぐプラットフォームを形成（日野川流域交流会）

日野川での環境活動から始まり、約20年前から日野川流域にある市町村の様々な立場の人たちが議論する場があり、日野川流域市町村をつなぐプラットフォームが形成されている。

行政支援のあり方

2

誰でも使えるアンカーの設置

越前市によって、誰でも使うことができる埋め込み式のテントのアンカーを整備したことにより、イベント開催時のテント設営費を抑えることができている。

民間ノウハウ

3

市の予算や助成金に頼らない仕組みを構築

イベント実施ではなく、小さなエコノミー経営の実現に向け、市の予算や助成金に頼らない仕組みを構築。民間（おしゃれなり・BAR）が、入場者から入場料を集めて運営している。

地域の独自性

4

解体と移動が簡単にできる小屋を開発

主要メンバーで、テーブル・椅子になる車輪つきの小屋“6PGazebo”（ロクピーガゼボ）を開発。車輪付きなので、出水時など緊急で移動が必要な時も、簡単に移動させることが可能となっている。

水辺の賑わいづくりを始める第一歩

約20年前から日野川流域では流域の関係者によるプラットフォームが形成され、そのプラットフォームから生まれたイベントの実施や、2012年（平成24年）からリバービジネスを実現するための「おしゃれなり・BAR」などを実施。

▷ 2014年12月（平成26年）
環境文化研究所田中氏がリバービジネスの新たな展開を模索する中で、国土交通省水管理・国土保全局 河川環境課に相談に行き、“ミズベリング”について知り、アドバイスを受ける。

▷ 2015年3月（平成27年）
第一回ミズベリング越前若狭を開催。ミズベリング開催によって、福井県で活動する官民の様々な立場の人が繋がるきっかけとなり、元々盛んだった水辺の活動がますます活発に。

〈取組みをさらに発展させるために考えられること〉

POINT①

管理・運営から、企画・運営・経営できる管理者への転換

IDEA

河川敷の公園において、公園管理者が管理・運営を指定管理者に委ねている場合、単に公園管理、維持事業者ではなく、イベント企画や事業経営ができる事業者にした方が良い。そのためには、指定管理者公募の募集要項の見直しと評価される仕組みの構築をするとよりよい。

POINT②

事業で得た利益を再投資する仕組みづくり

IDEA

水辺空間の整備や地域への還元などに収益を再投資できるように、事業者が事業収益を管理し再投資できる仕組みを構築するとよい。

POINT③

水辺空間を使いこなす設備を増強

IDEA

水辺空間の使いこなしの道具（テントなど）は、開発（購入）する初年度は費用が掛かってしまうが、次年度以降は費用が抑えることができるので設備を増強するとよい。だが、自治体の予算では厳しいので、国などの制度や助成金を活用するとよい。

POINT④
［ 中間支援組織のあり方 ］

有志が集まる“リバビズ大学”がハブとなり事業を引き続き展開

IDEA

あらゆる分野のプロが集まった“リバビズ大学”がハブとなり、“おしゃれなり・BAR”など主要プロジェクトを展開。また、水辺の利活用を観光とビジネスのツールを使って、少子化と定住化対策の解決策を考えている。

かわから始まる公民連携のまちづくり

プロジェクト概要

岡崎市では、2015年度にかわまちづくり支援制度を活用した乙川リバーフロント地区整備計画が始まった。地区内ではかわまちづくりをはじめ東岡崎駅周辺地区整備、歴史まちづくり、市道籠田町線と籠田公園の再構築、リノベーションまちづくりなどが行われている。このまちづくりの拠点を結ぶ主要回遊動線を“QURUWA（くるわ）”と呼び、そこを中心としたハード整備と各エリアで民間によるエリアマネジメントが計画されている。

かわまちづくりのハード・ソフトの両方の計画を岡崎市乙川リバーフロント推進課が一貫して推進している。2016年より、地元のNPO法人“岡崎まち育てセンター・りた”に委託し、河川空間を使いこなす社会実験“おとがワ!ンダーランド”を実施している。その中で殿橋のたもとにつくられた“殿橋テラス”は、ランドマークであるとともに、乙川と岡崎城などが一望でき、まちの魅力を再確認できる場となっている。

殿橋の欄干をカウンター化し、その裏側にある河川区域に「殿橋テラス」を設置。河川とまちの接点となり、ランドマークにもなっている。

実施範囲 Range of implementation

●種別

- 河川敷
- 公　園
- 水　面
- 道　路
- 民有地

●住所
愛知県岡崎市
実施範囲：乙川の吹矢橋～名古屋鉄道名古屋本線菅生川橋梁までの乙川とその沿川

●河川名
矢作川水系乙川

●河川管理者
愛知県

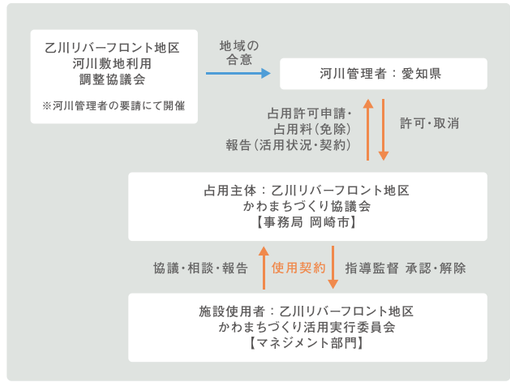
河川・場所の特徴・魅力 Features of rivers and location

市街地を流れる乙川は、桜百選に選ばれた桜並木、豊かな水面、広い河川敷、さらに、良質な水質などに恵まれており、川沿いの岡崎城とともに、観光産業都市を目指すまちの観光資源となっている。乙川リバーフロント地区は市街地の中心部にあたり、主要回遊動線「QURUWA（くるわ）」を設定し、公民連携まちづくりに取り組んでいる。

「QURUWA」とは　乙川リバーフロント地区（RF地区）約157haの多様な魅力を味わうことができる約3kmのまちの主要回遊動線。名鉄東岡崎駅、乙川河川緑地、（仮称）乙川人道橋、中央緑道、籠田公園、りぶら、岡崎公園など公共空間の各拠点を結ぶ主要回遊動線。かつての岡崎城跡の「総曲輪（そうぐるわ）」の一部と重なること、また、動線が「Q」の字に見えることから、「QURUWA」と命名。

実施体制・スキーム Implementation system. Scheme

〈 乙川リバーフロント地区かわまちづくり 〉



〈キーパーソン〉

かわまちづくり活用実行委員会運営（委託）
NPO法人 岡崎まち育てセンター・りた事務局長
天野 裕氏　［民間］
岡崎市の公共施策および公共施設の計画／デザイン／管理・運営、市民活動・地域活動およびまちづくりの支援や地域再生に取り組んでいる。

岡崎市都市整備部 乙川リバーフロント推進課
香村尚将氏　［行政］
乙川リバーフロント地区整備計画の推進に向け、ハード・ソフトの両面から様々な施策に取り組み、公民連携の推進体制の構築を行っている。

株式会社ツツイエンターテイメント 代表取締役
白井宏幸氏　［民間］
「五万石でも、岡崎様は城の下まで舟が着く」と唄われた、徳川家康公の生誕地岡崎城下舟あそびを通じて、川で感動のMomentを創るため、岡崎で舟運事業に取り組んでいる。

時系列 Time series

▶2013年

乙川リバーフロント地区整備基本方針

岡崎市からの委託を受けた岡崎活性化本部が基本方針策定のための提言書を策定。
岡崎市は提言書と市民対話集会、アイデアコンクール等を踏まえ、当方針を策定した。
官民の緊密な連携の元、この方針に基づきスピード感を持って取り組むこととした。

▶2014年

○「かわまちづくり支援制度」に登録
○乙川リバーフロント地区整備計画で社会実験や人道橋等の整備を計画（～2019年度）

愛知県管理河川ではじめて、都市空間と水辺空間の一体的整備、回遊性の確保に取り組み、観光拠点となるにぎわいの場の創出を図るため、国のかわまちづくり支援制度を活用した。また、岡崎市中心市街地で2015年度～2020年度の5年間の都市再生整備計画の実施が決定。

▶2015年

○まちづくりフォーラム
○岡崎デザインシャレット
○市民ワークショップ
○かわまちづくり協議会の設置
○河川敷地占用許可準則の都市・地域再生利用区域の指定

▶2016年

○社会実験「おとがワ!ンダーランド2016」の実施
○乙川リバーフロント地区まちづくりデザイン会議の設置
○ミズベリング乙川会議（おとがワ!ンダーランドの振り返りなど）他

社会実験 おとがワ! ンダーランドについて

岡崎市が進める乙川リバーフロント地区公民連携まちづくりのリーディングプロジェクト。
行政が、テラス・大型テント・ベンチ等の社会実験に必要な場づくりを行い、民間は公募により集まったメンバーにより各事業を実施する。
「おとがワ!ンダーランド」は前年に実施した市民ワークショップで命名された。

CONCEPT
おとがワ! ンダーランドの「ワ!」

- ワッ　みんながワッと驚くことが乙川から始まる
- 輪　乙川での活動や人の輪が広がる
- 環　上流から下流まで活動・資源の環がつながる
- 話　ついつい話したくなる岡崎での思い出があふれる

〈特筆ポイント〉

行政支援のあり方

1

公民連携による、まち全体のハード・ソフト計画

まち全体のハードとソフトの計画である“乙川リバーフロント地区整備計画”により、まちの賑わいを生み出すエリアマネジメントの計画を公共と民間が連携して行っている。

行政支援のあり方

2

堤内地に拠点を構え、エリアの価値向上のためのマネジメントを計画

乙川リバーフロント地区の価値向上のため、堤内側公有地等の事業者公募で、対象地と目の前の河川空間との一体活用などのエリア価値に繋がる内容を募集要項に入れていくことを検討している。

民間ノウハウ

3

ハード整備と並行して実施される河川の賑わいづくりの社会実験

ハード整備が進行している中、河川の賑わいづくりの社会実験である「おとがワ!ンダーランド」や、殿橋の欄干をカウンター化しその裏側にある河川区域にテラスを設ける「殿橋テラス」等を実施。堤防道路を通行止めにして、河川空間、堤防道路、堤内テラスを一体活用した社会実験を実施した。

地域の独自性

4

公民が一体となり作成する、アクションプラン構想

市民提案や社会実験の結果を受けて、公民連携まちづくり基本計画（QURUWA戦略）を策定している。7つのエリアの一つが乙川エリアであり、乙川の定義や将来像(エリアビジョン)を定めている。

地域の独自性

5

民間のアイデアを実現する仕掛けづくり

平成27年度に実施した市民ワークショップから「おとがワ!ンダーランド」や「殿橋テラス」のアイデアが生まれ、平成28・29年度に実現した。

水辺の賑わいづくりを始める第一歩

▷ 2014年3月（平成26年）
岡崎市はまちづくり団体「岡崎活性化本部」に、基本方針策定のための提言書の策定を委託し、それを元に乙川リバーフロント地区整備基本方針を策定。その中に「河川敷地利用調整のための協議会の設置」を明記。

▷ 2014年（平成27年）～
岡崎市は、まちと河川が一体となった、かわまちづくりを推進するため、専門家によるシンポジウムやワークショップを実施。NPO法人岡崎まち育てセンター・りたに委託している。

▷ 2015年3月（平成27年）～
「かわまちづくり支援制度」へ登録（愛知県管理河川初!）

▷ 2015年11月（平成27年）～
「都市・地域再生等利用区域」の指定（愛知県管理河川初!）

▷ 2015年（平成28年）～
岡崎市は、社会実験「おとがワ!ンダーランド」を実施。NPO法人岡崎まち育てセンター・りたに委託している。
専門家を交えたまちづくりデザイン会議も開催している。

〈取組みをさらに発展させるために考えられること〉

POINT①

水辺を利用する際の申請・協議の手続きマニュアルの作成

IDEA

水辺などの公共空間を使用する際、様々な規制や許可申請が存在するため、利用者が使用しやすいよう、煩雑な許可申請や協議の流れ等をマニュアル化してブックを制作。

POINT②

河川管理者と協議を重ね、河川の占用主体を地元が参画する民間組織へ移行していく

IDEA

現在はかわまちづくり協議会が占用主体となっているが、河川の占用主体を複数の拠点事業者等で構成された民間組織（中間支援組織）に移行していくことを検討している。エリアマネジメントできる事業者の選定と並行して協議を行っている。

POINT③

乙川へ還元する条件が組み込まれたエリアマネジメントの事業者の公募を検討

IDEA

エリアマネジメントの事業者公募では、乙川へ還元することを前程にするよう検討している。還元方法としては、河川の占用主体となる民間組織へ収益の一部を投入し、その組織が賑わい創出や地域の方を対象とした催し等を検討している。

POINT④
［ 中間支援組織のあり方 ］

エリアマネジメント協議会の設置

IDEA

岡崎市中心部の6つのエリアでエリアマネジメント団体が発足され、さらに全エリアが集まったエリアマネジメント協議会の設置を目指している。

先進事例紹介③

わかやま水辺プロジェクト

リノベーションスクールを契機に展開される水辺づくり

プロジェクト概要

和歌山市では、2014年から始まったリノベーションスクールを契機に、民間の資本で様々な会社が立ち上がり、空きビルが飲食店やゲストハウス、シェアハウスなどにリノベーションされ、生まれ変わっている。市堀川沿いの空きビルも川沿いのポテンシャルを活かした“水辺座”などの店がオープンし、水辺の価値向上に繋がっている。また、水辺の専門家“水辺総研”とまちづくり会社“紀州まちづくり舎”で構成された民間中間組織“わかやま水辺プロジェクト”が2016年から和歌山市の業務を受け、和歌山の水辺のあり方を議論するミズベ会議を開催し、水辺の将来像の検討や担い手の可視化などを行った。

2017年には仮桟橋と船着場を設置して水上アクティビティを実施し、また京橋駐車場にプラットフォーム拠点“MIZUBE COMMON（ミズベ・コモン）”を設置し、飲食やイベントなどを実施した。

“MIZUBE COMMON”では、水辺カフェが設置され、芝生広場では様々なイベントが実施され、仮桟橋ではSUPや市堀川クルーズが展開された。

実施範囲 Range of implementation

●種別

- 河川敷
- 公園
- 水面
- 道路
- 民有地

●住所
和歌山県和歌山市

●河川名
紀の川水系市堀川

●河川管理者
和歌山県

Map data ©2018 Google

河川・場所の特徴・魅力 Features of rivers and location

Map data ©2018 Google

和歌山城の外堀として形成された市堀川は、江戸時代は武家屋敷と町人街の境である京橋御門があるなど歴史があり船が行き交っていたが、高度経済成長期以降、川はまちの裏側へと押しやられる形となっていた。民間の団体が50年に渡る環境改善の活動を続ける事で、国・県・市を巻き込んだ取り組みがなされ、川の水質が改善しつつある。まちなかの商店街で月1回定期開催されているマルシェでは、過去2回、市堀川沿いの京橋駐車場でカヌー体験やマーケット事業などが実施された。さらに地域住民による清掃活動が行われるなど民間による活用が次第に行われてきており、分断されていた「かわ」と「まち」をつなげる回遊軸が編成されつつある。

実施体制・スキーム Implementation system, Scheme

〈 わかやま水辺プロジェクト 〉

河川管理者：和歌山県
↑ 占用許可申請　↓ 許可・取消
占用主体：和歌山市
↑ 協議・相談・報告　使用契約　↓ 指導監督 承認・解除
わかやま水辺プロジェクト

〈キーパーソン〉

［民間］

わかやま水辺プロジェクト
プロデューサー
岩本唯史氏
建築家でありながら、水辺総研代表として、「ミズベリングプロジェクト」ディレクターを務めるなど、水辺の専門家として活動。

［民間］

日本酒バー水辺座オーナー／元和歌山県職員
武内 淳氏
リノベーションスクールをきっかけにまちづくり会社「宿坊クリエイティブ」を立ち上げ、市堀川沿いに日本酒バー「水辺座」をオープンさせる。

［民間］

わかやま水辺プロジェクト
チーフディレクター
吉川誠人氏
NPO法人にこにこのうえん理事長。リノベーションスクールをきっかけにまちづくり会社「紀州まちづくり舎」を立ち上げ、和歌山の活性化の為様々な活動を行う。

［行政］

和歌山市 市長公室政策調整部
政策調整課企画員
竹家正剛氏
リノベーションスクールをきっかけに、官民連携の必要性を感じ、官民連携プロフェッショナルスクールに参加。まちなかの水辺を盛り上げる機運を感じ、水辺プロジェクトを企画し、民間と共に推進。

時系列 Time series

▶2014年

紀州まちづくり舎が主要メンバーを務める、ボボロハスマーケット実行委員会主催によるボボロハスマーケットにおいて、水辺でカヌー体験など

リノベーションスクールをきっかけに開催されているボボロハスマーケットは「てづくり」と「ロハス」をテーマにしたマルシェで、普段はぶらくり丁商店街で実施されているが、水辺でもカヌー体験と組み合わせて不定期に実施された。

▶2016年

◯和歌山市の「水辺空間を活かしたまちづくり手法検討・調査事業」
◯（民有地）水辺座オープン、ミートビルオープン

わかやま水辺プロジェクトが、水辺の歴史、環境、利用状況などの調査研究を行い、水辺のあり方を議論する「ミズベ会議」や「シンポジウム」を開催した。また、民間のまちづくり会社によって、河川沿いの空きビルに飲食店などがオープンした。

▶2017年

和歌山市の「平成29年度水辺空間を活かしたまちづくり手法検討・調査事業」・社会実験「ワカリバ」実施

わかやま水辺プロジェクトが、前年度の調査を元に、社会実験「ワカリバ」を実施。市民向けにわかやま水辺協議会創設に向けた意見交換会も実施した。

「水辺座」について

第3回リノベーションスクールの対象物件で、市堀川近くにある酒蔵にヒントを得て、和歌山の地酒と水辺の景観を楽しむことをコンセプトに提案を行い、事業化を実現した日本酒バー。元和歌山県庁職員の武内氏が代表を務めるまちづくり会社が運営する。市堀川を大きく望むことができ、和歌山市内の水辺の魅力を発信する中心的存在。

社会実験「ワカリバ」について

2017年の9/29～11/5の期間に、仮桟橋1つと船着き場を2つ設置し、市堀川で遊覧船やカヌー体験、SUPレンタルなどさまざまな水上アクティビティーを実施、さらに京橋駐車場にプラットフォーム拠点MIZUBE COMMON（ミズベ・コモン）を設置し、芝生広場にミニステージ、テントを設置し、飲食や物販、展示、イベントなどを実施した。

〈特筆ポイント〉

行政支援のあり方 **1**

水辺プロジェクトを推進するため、和歌山市庁内の関係部署を市長公室政策調整課が取りまとめる

水辺プロジェクトを推進するため、市長公室政策調整課が、河川港湾課や都市再生課、観光課、環境政策課など庁内の関係組織間の調整や情報共有を実施している。

民間ノウハウ **2**

“リノベーションスクール”を契機に、川沿いの民間のビルが飲食店などに生まれ変わり、まちづくり会社も発足

全国で採用されている、民間主導のまちづくりプロジェクト“リノベーションスクール”がまちなかからスタートし、現在は水辺へ広がり、川沿いの民間のビルが飲食店などに生まれ変わっている。まちづくりに対して意欲的なプレーヤーが多数おり、まちづくり会社が複数立ち上がっている。

地域の独自性 **3**

水辺総研という河川専門家（カーナビ）と紀州まちづくり舎（エンジン）の共同事業体で展開

単純なコンサルティングだとアドバイスで終わってしまうので、当事業のプロポーザルでは、“水辺活用の先進事例を専門的に知っているか”ということと、“地域で活動しているステークホルダーを知っているか”ということを求めた。前者をカーナビ、後者をエンジンと呼んでいる。

地域の独自性 **4**

パブリックマインドを持ったプレーヤーの存在と水辺のビジョンの可視化

ワークショップなどを通じて水辺のビジョンを可視化。また、今後実際にどのようなチームでどのようなプロジェクトを推進したいかを、水辺に関心をもつ人達にヒアリングし、それぞれのチームごとに関心事を表明してもらい、タスクフォースを結成。

水辺の賑わいづくりを始める第一歩

▷ 2014年10月～（平成26年）
ミズベリング和歌山が活動をはじめ、勉強会やイベントなどを実施。

▷ 2015年11月（平成27年）
リノベーションスクールをきっかけに、街中の遊休不動産が飲食店などに変わり、街が活性化する中、第三回のリノベーションスクールの中で水辺の日本酒Bar「水辺座」が提案され、事業化に向け動き出す。

▷ 2016年6月（平成28年）
水辺の遊休地の活性化の兆しや、内川の環境団体の長年の活動などで水辺まちづくりの機が熟して来ていることから、和歌山市が地域再生計画「まちなかへの大学誘致を核としたコンパクトシティへの取組」の中に、水辺空間の有効活用による、まちなかへの新たな動線の確保や回遊性の向上を目指し、「水辺を生かしたまちづくり事業」を位置付ける。

▷ 2016年8月（平成28年）
国の地域再生計画に認定され、「水辺空間を活かしたまちづくり手法検討・調査」が3ヵ年で始動。

〈取組みをさらに発展させるために考えられること〉

POINT①

市の方向性が変わっても継続できるプロジェクトチームの形成

IDEA

庁内で複数の関係部署を巻き込んだプロジェクトチームを結成し、市の方向性などが変わってもプロジェクトが継続できるようにする。

POINT②

施設（ハード）の設計段階で、河川占用する民間中間組織の意見が反映できる機会の創出

IDEA

施設（ハード）の基本計画（設計段階）に、河川占用する民間の中間支援組織の意見が反映できるよう、事業者プロポーザルに中間支援組織との協議を条件として記載すれば、実際に活用する中間支援組織の意見を反映することができるので、整備後の施設が利活用されやすくなる。

POINT③

計画を継続し続けるための資金確保の方策検討

IDEA

目指すべき目標を設定し中長期ビジョンを作成することによって、計画を継続していくための予算取りや、どのように資金を確保していくかを今後地域の特性に合わせて、検討できる。

POINT④
［ 中間支援組織のあり方 ］

エリア全体ではなく、各エリアごとに都市再生推進法人を設置

IDEA

まちづくりに意欲的な方が多く、各エリアごとに家守会社があり、9団体が都市再生推進法人の認可を受けている。

※都市再生推進法人とは…都市再生特別措置法に基づき、地域のまちづくりを担う法人として、市町村が指定する団体。市町村は、まちづくりの新たな担い手として行政の補完的機能を担いうる団体を指定できる。

事例紹介

淀川アーバンキャンプ

持続可能な水辺のまちづくりの検証

プロジェクト概要

“淀川アーバンキャンプ”は、淀川河川事務所と大阪商工会議所が連携して2015年から実施している。大阪の都心“淀川”に持続可能な水辺のまちづくりの仕組みを導入するための社会実験として取り組んでいるところである。2015年は十三エリアにおいて1日の実施、2016年は西中島エリアにおいて9日間（うち4日間は悪天候で中止）の実施、2017年は西中島エリアにおいて、約80日間の長期プログラム期間中に、食と演劇等が楽しめるプログラム、手ぶらBBQ、淀川を満喫できるクルーズ、アウトドアウェディングの受入れ検討などを実施し、民間事業者の主体的な事業を受け入れる仕組みづくりと民間事業の継続可能性を検証した。また、2週末（5日間）で実施した短期プログラムでは、梅田のビル群を眺めながら水路を行くカヌー体験、野草を詰んで調理して食べるワークショップ、シジミ採りやヨシ灯りの制作をして宿泊も体験する“子ども自然学校”などを実施した。

2017年はマルシェ型の短期事業者に加えて、主体的にプログラムを行う長期プログラムの事業者も公募した。また、自主事業としてこども自然学校を行った。

実施範囲 Range of implementation

●種別

- 河川敷
- 公　園
- 水　面
- 道　路
- 民有地

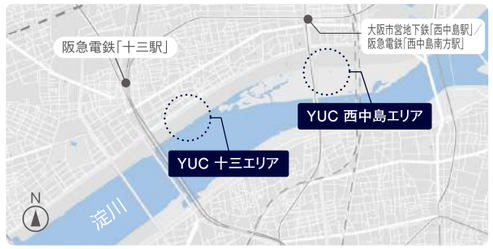
●住所
大阪市淀川区

●河川名
淀川水系淀川

●河川管理者
淀川河川事務所

Map data ©2018 Google

河川・場所の特徴・魅力 Features of rivers and location



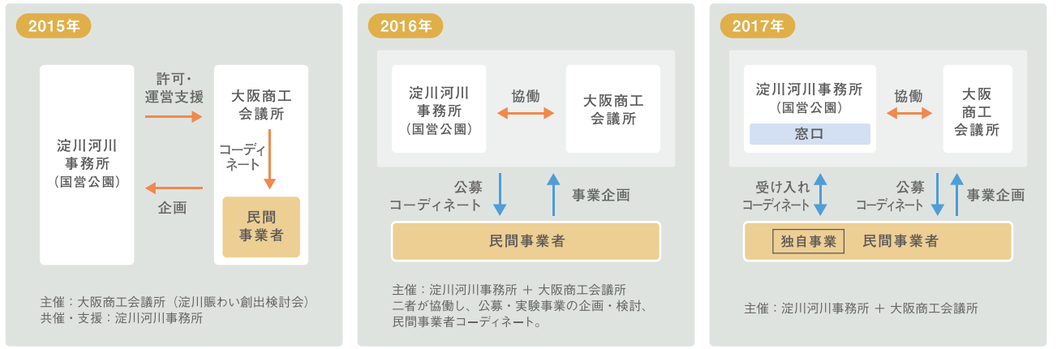
Map data ©2018 Google

都心の大阪・梅田エリアの対岸でありながら、ヨシ原が近くに広がる西中島エリアや野草が広がる十三エリアは、最寄り地下鉄駅からも比較的アクセスが良く、雄大な自然を体験できる他にない稀有な空間である。ただし、治水のための堤防があるので、まちと繋ぐ面では少しネックとなっている。

実施体制・スキーム Implementation system, Scheme

淀川の活性化を官民がともに検討していく体制

淀川のにぎわい創出に向けた推進体制の整備



時系列 Time series

▶2015年

淀川アーバンキャンプ2015

大阪商工会議所（検討会）が主体となり、活用のトライアル“淀川アーバンキャンプ2015”を実施。

▶2016年

淀川アーバンキャンプ2016

淀川河川事務所と大阪商工会議所が連携して主体となり、民間事業者の賑わいづくり参画の機会を公募により提供し、“淀川アーバンキャンプ2016”を実施。

▶2017年

淀川アーバンキャンプ2017

淀川河川事務所と大阪商工会議所が連携し2016年同様短期プログラムの公募と、民間事業者による80日間に及ぶ主体的な賑わいづくりの受け入れも行い、“淀川アーバンキャンプ2017”を実施。

長期プログラムについて

2017年は5つの事業者が参加し、約80日間長期プログラムを実施した。飲食事業者と演劇事業者によるパフォーマンスと楽しむナイトジンギスカン、手ぶらBBQ、淀川で日の出を迎えるクルーズ企画、アウトドアウェディングの受け入れ検討など多様な事業が展開された。今後は事業の営業期間の検討や雨天時の撤収の手法などを検討していく。

こども自然学校について

子どもたちが淀川の魅力をまるごと体験することで、身近な環境の豊かさ・大切さに気づき、自分の住むまちやそこを流れる淀川に誇りと愛着を感じてもらうことを狙いにして実施。1泊2日の環境教育プログラムを実施することで、環境教育の場としての安全性や運営体制・設備などを検証した。1日目は、シジミ掘りや、淀川の歴史的・文化的に重要なヨシを使った灯りづくりなどを行い、2日目は朝の自然観察を楽しみ、全体の振り返りを行った。

〈特筆ポイント〉

地域の独自性

1 大都市に隣接しながら、豊かな自然がある
（景観やその魅力を活用した企画）

淀川アーバンキャンプの会場は、大都市梅田に隣接しながら、ヨシ原など豊かな自然がある。こども自然学校やグランピングなどその景観や魅力を活用した企画を行っている。

行政支援のあり方

2 実施主体が、河川管理者でありながら公園管理者なので、官官連携がやりやすい

実施主体である淀川河川事務所は、河川管理者でありながら、淀川河川公園の公園管理者でもあるので、官官連携が取り組みやすい。例えば、各々がイベント実施する時や新たな取り組みを行う時に調整や連携がしやすく、相互に効果を高めやすい。

民間ノウハウ

3 共用部の設備（休憩テント・テーブル・ベンチ）のデザイン

共用部の設備（休憩テント・テーブル・ベンチ）を量産品の木材と農業用遮光ネットなど農業用資材で作成し、汎用性が高く、かつ解体しやすいデザイン性が高いものにしている。

地域の独自性

4 社会実験の効果測定を楽しく臨場感のあるものにする
（ヨシのフラッグ）

社会実験の効果測定として、来場者から一般的なアンケートを行うのではなく、眺めが良かった所に特製のヨシのフラッグをたててもらい、ヨシという淀川ならではの素材を使いながら、景観に変化を与える楽しく臨場感のあるものにした。

水辺の賑わいづくりを始める第一歩

▷ 2014年度

大阪商工会議所 都市活性化委員会が2015年2月に「淀川活性化と賑わい創出に向けた提言」（淀川を活用した観光振興に関する提言）をとりまとめた。

〈右図〉淀川下流域（中津・十三地区）の賑わい拠点イメージ
淀川が展望できるブリッジパーク、梅田の夜景が楽しめるクルーズ等

▷ 2015年度

大阪商工会議所 賑わい創出検討会でアーバンキャンプ2015実施内容を検討し、実施。

- 座長：大阪市立大学大学院工学研究科准教授 嘉名光市
- 委員：一本松海運株式会社／大阪小型水上旅客船協議会／大阪シティクルーズ推進協議会／大阪水上安全協会／京阪電気鉄道株式会社／阪急電鉄株式会社／阪神電気鉄道株式会社／株式会社モンベル／ヤマハ発動機株式会社
- オブザーバー：国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所／淀川河川公園管理グループ共同体淀川河川公園事務所／大阪府住宅まちづくり部／枚方市地域振興部／大阪市淀川区役所

〈取組みをさらに発展させるために考えられること〉

POINT①

自分たちの良いところをきちんと自慢すること

IDEA

「良いことをやっている」ということや魅力を正々堂々と言ったりすることは、足を引っ張られるのではないかと考えて、言いづらい風潮にあるが、自分たちの取り組みや環境を自慢するということは成熟社会では非常に大切なことである。

POINT②

今後のまち側との連携

IDEA

将来のまちの担い手であるこども達を育てることを目的とした「こども自然学校」など、共通の思いがある企画を河川管理者だけで行うのではなく、まち側の自治体などと一緒に企画・運営する。

POINT③

公共空間のマネジメントの仕組みづくり

IDEA

河川管理者であり、かつ公園管理者であるという立場から、河川だけでなく公園や道など公共空間全体のマネジメントの仕組みづくりを目指していくべきである。

POINT④

来場者が、積極的に運営者と関われるようにする

IDEA

こども自然学校などの一回目の来場者には、今まで気づかなかった淀川の魅力を気づかせるだけでよいが、2回目からは来場者とそれらのイベントを支えている運営者と関わっていけるようにすることが望ましい。

［ 淀川アーバンキャンプ ホームページ ］ http://www2.kasen.or.jp/yodogawa_uc/
［ 淀川アーバンキャンプfacebookページ ］ https://www.facebook.com/YodogawaUC/

ミズベスクールのQ&A

Q&A from mizube school

※ミズベスクール当日の会場からの質問とディスカッション内容を抜粋

Q.1

どのプロジェクトも様々な人が関わっていると思うが、人の巻き込み方で気をつけていることや配慮していることは?

〈パネリスト〉
岩本唯史氏
わかやま水辺プロジェクト
プロデューサー

A. 人の構成

・少人数から始める。人が多すぎても少なすぎても駄目である（泉英明氏）
・参加人数という観点では、3人以上からパブリックが担保される （忽那裕樹氏）
・仲良しグループではなく、違うジャンルの人にも入ってもらう（田中尚人氏）

〈アドバイザー〉
田中尚人氏
熊本大学熊本創生推進機構
政策創造研究教育センター准教授

〈アドバイザー〉
忽那裕樹氏
ランドスケープデザイナー／
株式会社E−DESIGN代表取締役

A. 巻き込み方の種類

・業務を推進するための巻き込み方と、合意形成を進める巻き込み方の二種類ある（岩本唯史氏）

A. 段階に応じた巻き込み方

・初動期は皆で一緒にプロジェクトを進めていき、展開期からはコアメンバーとビジターメンバーで役割を持って進める方が望ましい。コアメンバーとビジターメンバーの関わり方に差が出て、温度差がでてくるからである（忽那裕樹氏）

Q.2

地方都市で、課題設定、ビジョン作り、実践のサイクルを回すに当って、注意すべきポイントは何ですか?

〈アドバイザー〉
泉 英明氏
都市プランナー／
有限会社ハートビートプラン代表

A. 都心部と地方都市の違い

・都市部と地方都市は全然違う。都心部と言われている大阪でも、東横堀川や木津川などは投資がきびしく、投資は道頓堀川や中之島のエリアに集中している現状がある。地方都市では空間のプレイスメイキングのみでなく、事業者誘致がポイント（泉英明氏）

A. 実践のサイクル

・第一段階はまずは使ってみようというミズベリングのような盛り上がり、第二段階は中間支援組織やビジョン作りで、その次の段階はそこに投資をしてくれる小さな事業者やディベロッパーを大切にしなければならない。中間支援組織やビジョン作りは、あくまでも、よい民間投資の環境をつくるための手段である（泉英明氏）

Q.3

中間支援組織とはどのような役割か。また、その成り手とはどのような方ですか?

A. 役割

・収益は各事業者がメインで上げるが、中間支援組織もある程度収益を上げながら、各事業者を支援する組織（泉英明氏）

A. その他必要なこと

・都市のビジョンで、公が担うべきとところと民が担うべきところをはっきりさせる。行政側にも管理者ではなくプロジェクトを進めていくことを目的とした中間支援組織が必要である（泉英明氏）

A. 成り手

・今までの行政の中では中間支援組織という組織が想定されていない。地元からの信頼と公共からの認定の両方が得られている組織（泉英明氏）

・職能として、ファシリテーション能力があり、デザイン、経営、法制度に詳しいこと、アーバンプランニング能力があることなどが挙げられる。ミズベスクールに行ったり、勉強したりするなどノウハウを吸収することが大切である（岩本唯史氏）

・行政と民間の信頼関係が非常に重要であるので、新しい組織ではなく、すでに川の近くにいる組織が成り手になるのではないか（森田 宏氏）

〈パネリスト〉
森田 宏氏
国土交通省
近畿地方整備局 広域水管理官

A. 実践のサイクルの事例

・長門湯本温泉も川をメインにしてエリア再生を行っている。温泉事業者が撤退した跡地に対して星野リゾートを誘致し、そこからのランドスケープ等の提案を受けた。マスタープランを柔軟に運用して、民間の人と外部の専門家を交えてブラッシュアップしていき、公共空間の使いこなしや夜の照明計画などをビジョンに反映させている（泉英明氏）

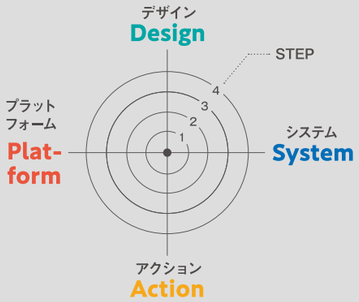
・長門湯本温泉の川床の社会実験は、民間の提案に対して、河川管理者側からは常設を目指して、安全性を含めてしっかり検証されて実現した（泉英明氏）

計画に基づき、進行中の温泉街のリノベーションにあたり、これからの民間事業者の事業機会をつくり出し、整備後に生まれる河川や道路などの公共空間の活用や交通計画の再編、温泉地の景観を向上させる照明などの検証・改善を行うため、社会実験も行われている

事業を発展させていくための工程スケジュール

Process Schedule for expanding Project

デザイン（全体計画・ハード）、プラットフォーム、システム（仕組み）、アクション、それぞれの過程で進捗を確認し、自分たちの事業の特徴を把握しましょう。



STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
計画期 Planning period	初動期 Initial period	展開期 Spreading period	定着期 Fixed period
全体を計画し、活動を開始する	仕組みの検討などの基盤づくり	官民連携の定着に向けた動き	事業が定着する

Design

デザイン（全体計画・ハード）

事業の立ち上げから実施までの流れやハード整備について

- ロードマップを作成する
- エリアを設定する
- 必要に応じて、ロードマップやエリアの見直し
- 場内・場外を一体的に考えた計画、ハード整備の検討
- 周辺市街地を含めた全体計画、ハード整備

水辺活用が日常風景となり、地域の魅力となる

- ●水辺活用の利用促進
- ●継続した水辺空間の利活用
- ●地域の魅力向上

Platform

プラットフォーム

活動を継続させるための担い手探しや育成、ファンづくりについて

- プログラムを実施する“担い手”を発掘
- 担い手を育成し、連携を促しプラットフォーム化
- ファンづくりの実施
- 地域、自治体との連携

産官学民協働による推進

- ●官民連携
- ●活動団体の活動の場の創出

System

システム（仕組み）

事業を継続して運営していく体制の構築や資金確保の方策について

- 運営体制を検討
- 河川敷地占用準則の都市・地域再生利用区域の指定を受ける
- 中間支援組織等の体制検討
- 資金確保の方策を検討
- 中間支援組織を結成

自立した運営

- ●新たな観光資源の創出
- ●まちの新たな賑わい空間の創出

Action

アクション

社会実験をはじめとする実践

- ワークショップ等の開催
- イベントの実施
- 長期間（数カ月）の収益事業を実施

日常的に賑わいを創出

- ●地域と一緒に一体的な活用

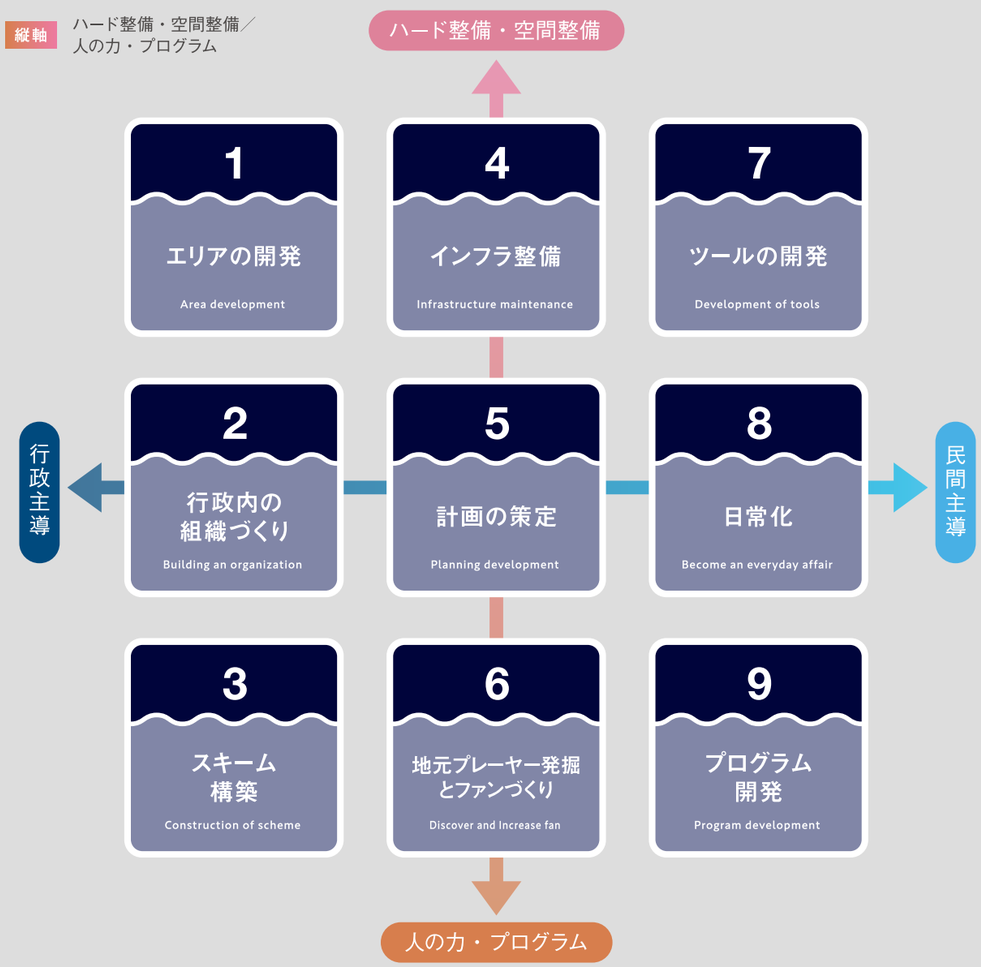
水辺事業を行う上での 9つのチェックポイント

9 Checkpoints for driving a waterside business

水辺の持つ課題や魅力、そして将来的に目指すべき水辺のあり方は、そのまちや水辺によって違いはある。しかし、水辺事業を進めるべきポイントを整理することは、共有すべき課題も多い水辺事業において非常に有効な指針となる。そこで今回の先進事例から抽出されたノウハウを踏まえ、水辺事業を行う上での9つのチェックポイントを、縦軸の「ハード整備・空間整備や人の力・プログラムからのアプローチ」と、横軸の「行政主導・民間主導のアプローチ」との2軸上に整理し、各ポイントについて内容説明を行っている。
これらのポイントをチェックすることで、水辺事業を推進する上で重要なポイントを押さえているか確認できるため、各事業においてチェックポイントを参照いただきたい。また、今回掲載した先進事例おいて、どのように9つのポイントが実施されているかチェックを行った。

横軸　行政主導でできること／民間主導でできること

縦軸　ハード整備・空間整備／人の力・プログラム



1 エリアの開発

水陸が一体となった開発方針となっているか？

POINT

水辺の賑わいとまちなかの賑わい、それぞれが互いに滲み出し、エリア一体における活動的で多様性の高い界隈性を、水陸の一体的開発の方針により創出することが望ましい。

- エリア内の水辺とまちなかを回遊できる、「歩いて楽しい空間づくり」の開発の仕掛けが組み込まれているか。
- 河川の横断方向と縦断方向ともに、連続的に移動できる整備計画となっているか。
- 市民が関わりやすく、親水性が高い水辺となっているか。

2 行政内の組織づくり

プロジェクト支援のための スムーズな庁内体制を構築できているか？

POINT

市民活動団体、あるいは民間事業者の水辺利活用を支援するためには、スピーディーな庁内情報共有と決断が求められる。河川関係課、あるいは、まち魅力創出関係課だけではない、水辺利活用を推進するための横串しの庁内体制が必要である。

- 水辺活用に対する、民間支援の窓口が一本化されているか。
- 利活用に対する許可や技術アドバイスを支援するための、各種行政専門職を融合したプロジェクトチームが結成されているか。
- プロジェクトチームに、利活用の判断をするための庁内権限が委譲されているか。

3 スキーム構築

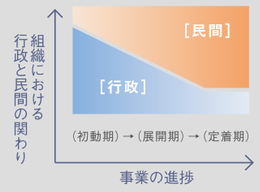
事業ステップに合わせた、官民の組織体制が描かれているか？

POINT

水辺の賑わいづくりを推進する事業の進捗によって、官民それぞれの組織体制はフレキシブルに更新していくものである。どのような段階で、どんな組織体制としていくか、組織体制構築に対する計画を練っておくことが重要である。

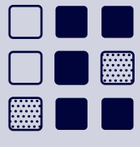
- 事業ステップにあわせた行政の支援ボリュームの考え方を示せているか。
- 中間支援組織の更新計画は考えられているか（任意団体、NPO、一般社団法人、都市再生推進法人など）
- 事業を推進しながら組織体制の課題を洗い出し、見直しを図っているか（組織体制自体のPDCA）

事業ステップにあわせた、
行政の支援ボリュームの推移イメージ



9つのチェックポイントの実施状況

Case. 01
ミズベリング越前若狭
の場合



4 インフラ整備
越前市によって、誰でも使うことができ埋め込み式のテントのアンカーを整備して、イベント開催時のテント設営費を抑えることができている。

5 計画の策定
〇ビジョン…水辺で少子化・定住化対策を行う。
〇共有…リバビズ大学の活動で、ビジョンを共有。
〇資金確保…助成金や補助金に頼らない小さなエコノミー経営を目指す。
〇PF形成…流域の様々な立場の人たちを繋ぐ日野川流域交流会。

6 地元プレーヤー発掘とファンづくり
日野川流域交流会が運営する“リバビズ大学”がハブとなり、研究を行う学生や様々な分野のプロが地元のプレーヤーとして活躍している。

7 ツールの開発
テーブル・椅子になる車輪つきの小屋“6PGazebo”を開発。車輪つきなので、出水時など緊急で移動が必要な時も簡単に移動させることが可能である。

9 プログラム開発
音楽や食事を楽しむことができるおしゃれな「リ・BAR」の他、2016年には、“6PGazebo”の貸し出しを行う“Paradise in River”を実施。

■ 重点的に実施（④⑤⑥⑦⑨）　▒ 現在進行中（③⑧）　□ 未着手（①②）

4 インフラ整備

地域特性に合致したインフラ整備計画となっているか？

POINT

水辺の継続的な賑わいづくりには、交通アクセスや周辺の居住人口などのポテンシャルが重要な要素の一つになるため、地域交通特性や周辺居住密度に合わせたアクセスインフラの整備がポイントとなる。また、プログラム実施に必要な各種設備の設置にあたっては、ニーズに合致したものとなるよう十分な精査が必要である。

- 河川への交通アクセスインフラ（駐車場、アクセス道路、歩行者ルート）は、地域特性に合致しているか。
- 定常的な飲食事業や短期間のイベントなど、用途に合わせた設備ニーズを社会実験等を通して、把握しているか。
- 水辺とまちの結節ポイントとなる船着場の整備計画は示されているか。

5 計画の策定

官民の両者が主体となって、計画づくりを策定しているか？

POINT

水辺づくり、水辺再生の計画は官民の協働事業である。どちらか一方が主導するものではなく、双方がアイデアを持ち寄り、まずは実現性や官民分担の内容、責任範囲を問わない理想的な計画を策定することが望まれる。理想の計画を常に参照しながら、官民それぞれが実行性の高いアクションを実施していくための個別計画づくりと仕組みの構築が必要である。

- 官民がアイデアを持ち寄ることができるプラットフォーム（協議会等）を構築しているか。
- 官民協働計画にお墨付きを与える会議体（自治体トップと民間トップの意思決定会議体）を設定できているか。
- 水辺計画やムーブメントを、市民と共有するチャンネルを有しているか。
- 行政、民間ともに、計画を担保するための資金計画が十分に精査されているか。

6 地元プレーヤー発掘とファンづくり

活動を支えるメンバーのクラスターが構築できているか？

POINT

水辺の賑わいをづくりにおいて、中間組織をつくって多様な活動を支援する立場のコアメンバー、積極的に水辺でプログラムを展開するクラブメンバー、水辺を楽しみ、水辺ファンとなってくれるビジターメンバー、といった地域パーソンのネットワーク化（構造化）が望まれます。

- 地域パーソンのネットワーク化ができているか。
- 行政・民間・市民が、それぞれと協調し、それぞれが評価することのできる三権分立の体制を構築できているか。
- コアメンバーの中心となり、行政・民間・市民をつなぎとめる役割であるトライセクターリーダーは存在するか。

地域パーソンの
ネットワーク化（構造化）イメージ

9つのチェックポイントの実施状況

Case. 02
おとがワ!ンダーランド
の場合

1 エリアの開発
ハード・ソフト両方を含む乙川リバーフロント地区整備計画によるハード整備計画によりハード整備を推進するとともに、まちの賑わいを生み出すエリアマネジメントの計画を公共と民間が連携して行っている。

2 行政内の組織づくり
乙川リバーフロント推進課が乙川リバーフロント地区整備計画を推進するため、市内部及び外部（河川管理者、警察等）との調整を一括して行う。

3 スキーム構築
行政と民間が共有するエリアビジョン（将来像）で、行政と民間の関わり具合の変化に応じた段階的なスキームを構築していく。中間支援組織として、将来的にエリアマネジメント連絡協議会の設置を検討している。

5 計画の策定
○ビジョン・共有…行政と民間が共有するエリアビジョン（将来像）を地域・民間が中心となり策定している。
○民間による自立可能な運営…2020年度に民間主体での自立した組織づくりを目指している。

6 地元プレーヤー発掘とファンづくり
社会実験“おとがワ!ンダーランド”を約半年間行い、随時プログラムを募集した。水辺に関心のある地元プレーヤーの発掘・育成とファンづくりを行う。

8 日常化
堤内側沿川のまとまった公有地の事業者募集では、堤内側と河川空間を一体的に活用し、賑わいを日常化に繋げることを目指す。

9 プログラム開発
別々に行っていた天体観測プログラムとクルーズプログラムを組み合わせて、新たなプログラム開発を行った。

■ 重点的に実施（①②③⑤⑥⑧⑨）　▨ 現在進行中（④）　□ 未着手（⑦）

7 ツールの開発

賑わいを増幅させる、シェア型ツールをオープン化できているか？

POINT

水辺での活動を展開する際に必要となるテントやイス、発電機といった資機材の準備は、どの活動団体にとっても費用負担となる項目である。行政や中間支援組織が、イベント等に共通に必要となる上部ツールや、アンカー等のベースツールを貸し出すことで、活動団体の費用負担が軽減し、活発なアクティビティが創出される。

- 会場図や必要物品、運営計画など、イベント開催に必要な基礎データがオープン化されているか。
- テントまたは、その代替となる上部ツールを有しているか。
- テント等と固定するアンカー等のベースツールが準備されているか。

8 日常化

継続的な賑わいづくりへシフトできるか？

POINT

水辺の賑わいづくりは、期間に短期に絞ったイベントから始めることがベストであるが、水辺の賑わいをまちの魅力の一つして位置づけるためには、年間を通した水辺活動の展開が必要となる。そのためにはイベントだけでなく、飲食・スポーツ・舟運・観光・環境教育等の事業が成立する方向性へとシフトさせる必要がある。

- 年間を通じた賑わいコンテンツ創出のための計画がなされているか。
- 収益事業性を考慮した採算性算出や、事業実施のための規制緩和等が検討されているか。
- 短期事業と長期事業の双方が、相乗効果を創出するような計画となっているか。

9 プログラム開発

ご当地水辺プログラムを創出できているか？

POINT

水辺ビアガーデンやパドルボートなどは、全国の水辺アクティビティプログラムとして、市民権を得始めているところである。今後は、その地域ならではの水辺プログラムを開発していくことで、他地域とのさらなる差別化を図ることが求められる。

- キラーコンテンツと呼ばれる、その地域特有のオリジナルプログラムを開発できているか。
- 地域の自然環境を組み込んだ教育プログラム等の提供がなされているか。

水都大阪のラバーダック

9つのチェックポイントの実施状況

Case. 03
わかやま水辺プロジェクト
の場合

2 行政内の組織づくり
市長公室政策調整課が和歌山市庁内の関係部署を取りまとめて、事業を推進している。

3 スキーム構築
行政と民間が共有するエリアビジョン（将来像）を現在策定し、スキーム構築も合わせて検討している。中間支援組織として、都市再生推進法人の設置も進んでいる。

5 計画の策定
○ビジョン・共有…行政と民間が一緒に行うワークショップを通して、水辺の将来像の検討や担い手の可視化を実施。
○資金確保…国の地域再生計画
○PF形成…現在はわかやま水辺プロジェクトが　和歌山市内の水辺に関心ある人を繋ぐプラットフォームとなっている。

6 地元プレーヤー発掘とファンづくり
リノベーションスクールや、わかやま水辺プロジェクトが主催するワークショップやシンポジウムを通じて、地元プレーヤーの発掘と育成を行う。

8 日常化
水辺の空きビルのポテンシャルを活かした飲食店などをオープンさせている。社会実験「ワカリバ」でも事業化を視野に入れ、飲食を展開する。

■ 重点的に実施（②③⑤⑥⑧）　□ 未着手（①④⑦⑨）

水辺のさらなる発展を目指して

Summary

このノウハウブックの作成にあたり、ミズベノウハウ抽出会議において水辺を活用するため先進的な取り組みをしている各事業の実践者の他、行政関係者も参加し、また、専門家も交えた議論を行ったことで、実践者の特筆するアイデアや実践者と行政協働によるミズベノウハウ、行政側の体制づくり、支援策など様々な水辺活用ノウハウを抽出･整理した。

さらにミズベスクールでは、より具体的に水辺活用ノウハウや発展に向けたポイントなどを各事業の実践者から発表してもらい、会場に集まった多くの水辺活用に関心の高い民間の方や自治体関係者などと情報共有を図るとともに、会場から質問に対するディスカッションも行い、中間支援組織の体制・ビジョンの可視化の重要性など、各事業の共通点を見出し共有できたことは非常に意義深いものとなった。

この事業者と行政との協働により抽出された水辺活用のノウハウを体系的に整理し、また、取り組みを進めるにあたって共通する9つのチェックポイントなども整理しとりまとめた。

これらの内容が、今後、各地で行われる水辺の事業を行う上で、水辺の活用の手がかりとなり、役立つものになることを願っている。

専門家紹介・あとがき

Introduction of experts, Afterwords

水辺さえあれば、いつでも、どこでも、誰とでも。

熊本地震、九州北部豪雨災害に見舞われた九州から、水都大阪で行われた第1回ミズベスクールに参加でき、たいへんうれしく思います。ここ数年「共感を呼ぶ公明正大な志」を vision として、誰かと一緒に（diversity）変わることを恐れず（dynamic）楽しくやる（sustainable）ことを心掛けて、地域づくりに参加してきましたが、皆さんと話すことで、さらなる仮説を創造することができました。金子みすゞさんの「みんな違って、みんないい」そんな、お互いのチャレンジ、地域らしさを認め合える「寛容さ」を大事にしたいと思いました。

熊本大学熊本創生推進機構
政策創造研究教育センター准教授

田中 尚人

Naoto Tanaka

1971年京都府生まれ。博士（工学）。2006年より熊本大学大学院自然科学研究科准教授、2010年より現職。専門は都市地域計画、土木史、景観論。熊本県を中心に、持続可能な参加の概念のもと、景観まちづくり、文化的景観保全、土木遺産の保存・活用に携わる。

MIZBERINGの次のステージへ、想いや発明の共有と実践へ。

ここ数年で MIZBERING という言葉や動きが全国に広がったスピードは驚くべきものがある。大阪で活動していた我々もその渦にのり、様々な人たちと出会い抱えている状況を聞いた。イベントではなく、将来ビジョンを描き社会実験を経て常設化していくプロセスは、まだまだ試行錯誤の段階であり、お互いのまちが学びあい、知恵を出し合い、実践に移していくには、関係者のネットワークが不可欠だ。これをきっかけとして、近畿から事業者・NPO・河川管理者などの MIZBE の輪を深化させていけたらいいなあと思う。

都市プランナー／
有限会社ハートビートプラン代表

泉 英明

Hideaki Izumi

高松、下関、大阪なんば、豊田、岡崎のまちなか再生や公共空間のプレイスメイキング、工業地域の住工共生まちづくり、着地型観光事業「OSAKA 旅めがね」、水辺空間のリノベーション「北浜テラス」、「水都大阪」事業推進などに関わる。著書に「都市を変える水辺アクション」（共編著、学芸出版社）。

水辺の使いこなしの積み重ねが地域の人々の共感を育む。

とっても魅力的な水辺の使いこなしが、地域に根付きはじめている実感を持てる機会となった。それぞれの河川空間の特性と地域独自の活動がつながっているのだ。市民、企業、行政などが共有するビジョンを持ち、関わる人々をつなげて少しずつ実現していく中間支援の役割を担う人々や組織のあり方も模索され機能しはじめている。

先進的にタッグを組む公と民が一堂に会し、具体的に行動したが故の悩みを、楽しく超えようとする姿と知恵を共有できた意義は大きい。今後、得られた知見が広がり、互いに応援しあえる協働と競争の仕組みができることを願う。

ランドスケープデザイナー／
株式会社E-DESIGN 代表取締役

忽那 裕樹

Hiroki Kutsuna

公園や広場、大学キャンパス、商業・集合住宅・病院などのランドスケープデザインとプログラムを国内外で展開。またパークマネジメント、タウンマネジメントと通じて、地域の改善や魅力向上に様々な形で携わる。ミズベリングプロジェクト諮問委員。今回のミズベスクールのプロデューサーを務める。

水辺を活かしたまちづくりで地域のにぎわいを復活。

河川占用の規制緩和があって、ミズベリングの号令のもと、各地で水辺の活用・賑わいが急速に進んでいる。この発展には、行政と民間の信頼関係が重要であり、中間支援組織の存在・役割がポイントであることも確認できた。今回ミズベスクールで得られたノウハウは、皆さんの活動の場で是非役立てていただきたい。ミズベリングを一過性のイベントで終わらせず、水辺がまちづくりと共に地域に根付いた賑わい、活力の源となって発展していくことを願っている。国交省も旧来の河川管理の枠にとらわれずに、地域や利用者の視点に立って、皆さんと一緒に考えていきたい。

国土交通省 近畿地方整備局
河川部 広域水管理官

森田 宏

Hiroshi Morita

1958年滋賀県生まれ。1981年国土交通省（旧建設省）入省。整備局では、ミズベリングの他、河川環境や舟運、ダムの観光資源開発などを担当。大臣官房技術調査課長補佐、淀川ダム統合管理事務所長、木津川上流河川事務所長等を歴任して、2016年から現職。